

古本屋の戦後

古本屋ふれあい人生

桑原 弘



西田幾多郎の「善の研究」、阿部次郎の「三太郎の日記」、倉田百三の「愛と認識との出発」など、とくに哲学や思想関係の本は眼の色を変えて引っぱりだこでした。

テレビが普及しはじめた頃、大宅壮一が「テレビで一億総白痴化だ」と過激な発言をして、大きな話題を呼んだことがありました。

評論家とは大げさなことを言うものだ。別に本の売上げが落ちこんだということもないのに・・・とその時は思ったものでした。三十数年たった今改めて思うのは、まさかこんな人々が本を読まなくなろうとはという慨嘆です。

顧みますと、私が家業の古本屋を継いだのは、戦争が終わった昭和二十年の秋でした。

あの頃の日本人は、虚脱感とひもじさにさいなまれながら、一方で活字に飢えていました。とにかく本でさえあれば右から左へ飛ぶように売れたものです。

たまたま店の本棚に一冊並べていた「善の研究」を、「あつたッ」と同時に見つけた学生が、奪いあいのあけくジャンケンで買っていったこともありました。

ひもじさに耐え、時には水で腹ふくらしてでも、欲しい本を手に入れようとした当時の学生の真剣な読書意欲は、いうならば敗戦の焼跡から何が何でも立ち上ろうとする、当時の日本人のけなげなバイタリティーの、これも一つのあらわれだったのかも知れません。

俄かに古本屋が増えて、松江市内に八軒の店が競いあつていった戦後三、四年の間が、古本屋の云わば黄金時代であつたでしょうか。

昭和二十四年ドツダの緊縮政策から、世の中が猛烈な不景気

に見舞われ、古本屋の世界にも急激な転換期がやってきました。洪水のように出廻ってきた鮮やかな新刊書に圧倒されて、戦前本主体の古本屋の店先はどこも閑古鳥が鳴くようになり、二十五年にかけて次々転・廃業に追いこまれてゆきました。もうその頃には、戦前の観念論の哲学書など見向きもされなく、市会へ送り出したものも二束三文でした。

古本屋へ足しげく通う本の「極く好き」な人——今はすっかり少なくなったそういう人たちの中で、心に残る忘れ得ぬ人々があります。

古風な中折帽子に、書類のギツシリ入った重そうな大きなカバン、口を始終もぐもぐさせながら、肥った大きな体を左右へゆするように、ノッシノッシと入ってきて、開口一番「よオーッ」と大きな声——今でもそれが目に浮ぶのは、県の町村会長をしておられた尾崎卓郎さんです。

「松江へ出ると、息子んとこへは寄らなくても、君んとこだけは立寄らぬ訳にゆかんヨ」破顔

大笑しながら「何かおもしろい本は出てないかい」と催促される。時には茶菓子を頬張りながら、天真爛漫な自慢話がはじまる。

「ボカこう見えても太鼓の名人でな、このあいだ村の祭りに、大勢の見物人の前に双肌ぬいで、テンツクテンツクドンドンと、ハー見事な太鼓を打ってみせてやったよ。予想外の腕前に村人がみんな目をむいて吃驚していたなアー、ワツハツハツハツ」

戦前、北大の学生部長や大阪外語の学長をしてもらったので、東京へ陳情に出ても、各省にえらくなった昔の教え子がいて、先生々と、どこでも大いに顔がきいたということです。うちの店へ立寄られた翌日の寒い冬の日、突如急逝されてから、もう三十年が経つでしょうか——。

「オラから酒と本をとったら、生きちよる甲斐があーまっせんでネー」そう云いながら、晩年のMさんは朝から焼酎をひっかけていました。酔っぱらってやってきて、安い本を漁っていつては、しばらくたつとすぐ又それ

が焼酎代に変わるのです。時には汚れた文庫本に卵を一つ二つ添えて持参し、焼酎代の四十円で引取ってくれと云いました。

戦前、赤として監獄におちこまれ、軍隊では要注意の一兵卒としてさんざんいたぶられたMさんが、酔って椅子に腰据えるとき——昔の苦い鬱積された思い出が、ふつ、ふつと脳裡によみがえってくるのか、ロレツの廻らぬ口調で語りかけるのでした。

「戦争に負けた日でしたワ。営庭で『日本なんか、日本なんか戦争に負けてよかったワイ』と云ってやったら、聞き咎めた将校奴が、軍刀を抜いて貴様殺してやるッ」と、ボーチャゲて来ましてネ——「しきり語って、又酔いにうなだれながら、「オラのこんな、くだらん話を、黙って聞いてござつしやるのは、クワバーさん、お前さん位のもんですワ」そうつぶやきながら、老いて脆くなった涙線をにじませるのでした。

昼間から酔っぱらって、しょっちゅう大道にぶつ倒れ、周りのものにすっかり疎んじられていたMさん。そのMさんが、昭

和初期演劇運動をやっていた頃、ひそかに手に入れて、あの弾圧の時代から戦後まで大事にかくし温めてきた雑誌が、今も私の手許にあります。「戦旗」「前衛」

「プロレタリア文学」、あぶらに汚れ、表紙のいたんだそれらの雑誌。それを手にとるたびに私は、今は亡きMさんの苦澁に満ちた思いや、孤独な哀しみが伝ってくる心地して、思わず涙を禁じ得ません。

Mさん。酒と本の好きな市井の表具師で、善意のかたまりのような人の好き、そしてナイーブな詩人でもあったMさん。そのMさんの名を三島禎一郎さんと言います。

若い頃から古本屋歩きを楽しみ日課として、本の虫のように書物に親しみ、自ら「書痴」と稱していた人に小竹原浅助さんがありました。氏は戦前神戸の町に住いして、あちらで蒐めた考古学や古美術関係の本には素晴らしいものがありました。戦災で殆どを焼き、疎開していた一部の蔵書が残ったゞけとの話でしたが、それでも氏の全盛時代に買集められたものだけに、

古本屋には涎れの出そうな本が書棚に並んでいました。

郷里へ帰ってからの戦後の氏は不遇でした。志世に容れられず、病気で職を退いてからは、ノイローゼになったりして、生れ在所のさゝやかな家に、老妻とふたり、淋しい憂悶の日々を送っておられました。昔蒐めた赤絵の皿や中国の古陶磁などは殆ど売却してしまわれたけど、書物だけは終生手離そうとされませんでした。

四十九日を過ぎた初秋のある日、靈前に線香を手向け終った私に、憔悴の色をにじませた老未亡人がこう仰言いました。

「主人が大事にしていた本は、地元の資料館へ寄附致しました。生前あの人のことを、心ない世間の人々は、気狂い位にしか見ていなかったようです。ですけど、せめてあの人の愛した蔵書を通して、世間の人が少しでも故人を理解して下さるならば、それがなにより嬉しいことに思われたからです・・・」

私はひそかに自分を恥じ、深く心を打たれながら、思い至りました。あの蔵書の一冊々々に、氏の思い出と愛着と、過ぎこし

かけがえない人生が投影されてあったであろうことを――。

今の学生のアルバイトは旅行や遊ぶためのものが多いようですが、親も貧しかったひと頃の学生のアルバイトは、それこそ苦学でした。

大分以前のことです。うちの店へ始終出入して、本を売ったり買ったりしていた島大生がいました。いよいよ卒業してくにへ帰ることになり、荷物を一緒に駅まで運んでやった後で、乾いた喉をうるおそうと近くの喫茶店へ入りました。その時、その学生が店内を珍らしそうに眺めながら、こうもりました。

「僕は四年間の学生生活の間で、こんな一般の喫茶店へ入ったのは、今が初めてゞすよ」

私はその言葉を聞いたとき、思わずホロリとなりました。

蔽衣破帽、放歌高吟して大道を闊歩した昔の旧制高校の生徒は、ロマンチストでエリート意識に燃え、ブルジョアの子弟が多く苦労知らずでした。今の学生はアルバイトは当り前、社会により密着して生きているから、

現実的ですね。甘いロマンチズムをかゞげる代りに、社会の矛盾や弱者の存在に敏感で、ボランティア活動も活発です。今回の大災害にもいち早く立上った若い人たちの姿を見て、日本の将来も満更ではないと意を強くしたことでした。

古本屋の眼から見ても、一番変わったのは高校生ですね。ひよる背が高くなったこと――いやそれよりも、本を読まなくなったことです。旧制の高校生は古本屋へ出入するのは当り前で、古本屋漁りと読書の味を知らぬは高校生に非ずと心得ていました。今の高校生は殆どが、うちらのような古本屋には無関心で素通りです。ときたま学校帰りの自転車の高校生が、信号待ちしてこつちを見、

「この店なに屋さん？」

「あら、貸本屋さんじゃないの」

なんてやっています。おこる気にもなれません。時代が変ってしまいました。

マンガ屋さんはまだ時流に乗っていますが、かたい本やハード

カバーの多い、種類は何でも扱うよろづや式の在来型古本屋は、地方で今や命数がつきようとしています。

でもいゝと思っています。五十年この商売で食わして頂き、多くのお客さんと人間的なふれあいや交わりを続けさせて頂いたことは、古本屋冥利にあまる有難いことでした。たとえづんぶん細りになろうとも、今更やり方変える気もなければ、悔いもありません。以上が老境に足をふみ入れた田舎の一古本屋の感慨です。

(松江市 グルマ堂主人)

第1回 千葉セントラルプラザ

古本まつり

(千葉県古書籍商業組合協賛)

会期 3月25日(土)～4月2日(日)
10時～7時(最終日6時閉場)

場所 千葉セントラルプラザ
7階大ホール
(最寄り駅…京成千葉中央 JR千葉駅)

事務局

〒277 柏市あけぼの4-4-1 関川ビル1F

このま書房

Tel 0471 (47) 2755